薔薇の女

笠井潔

角川書店

薔薇の女
笠井 潔

昭和五十八年三月三十一日 初版発行

発行者 角川春樹
発行所 角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三(二六五)七一一一 大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八 〈郵〉一〇二

大日本印刷・鈴木製本

© Kiyoshi Kasai, 1983 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872357-0946(0)

目次

序章　ルアーブルの女　7
第一章　戦慄の血文字　24
第二章　狂気の薔薇　86
第三章　肉人形の祭壇　145
第四章　宿命の双生児　207
終章　ワルシャワの女　276
あとがき　287

装丁　大西重成

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

薔薇の女

――〈アンドロギュヌス〉殺人事件――

《本書に登場する人物》

〈アンドロギュヌス〉	姿なき連続屍体切断魔。若い娘を殺害し、屍体の一部を切断して持ち去る
シルヴィー・ラテーヌ	〈アンドロギュヌス〉の最初の犠牲者
マーガレット・フランク	〈アンドロギュヌス〉の第二の犠牲者
アンヌ・マリー・メリエス	〈アンドロギュヌス〉の第三の犠牲者
ナディーヌ・ジュネット	〈アンドロギュヌス〉の第四の犠牲者
ドミニク・フランス（リュシエンヌ・レヴィ）	戦前の人気映画女優。戦後引退し、十五年前に原因不明の自殺を遂げた
アンドレ・レヴィ	ドミニクの夫でユダヤ人資産家。戦後五年ほどで病死
ポール・ブルレー	レヴィ家の執事だった男
ジョルジュ・ルノワール	戦前からの高名な文学者。この年、ドミニク・フランスに関する評論を出版した
シャルル・ロワゾー	〈アンドロギュヌス〉に関する情報提供者
ベアトリス・ベランジュ	パリ郊外アントニーの邸宅に住む資産家の婦人
アルベール・ベランジュ	ベアトリスの一人息子、心理学者
アグネシカ・ベランジュ	ポーランド系フランス人でアルベールの妻
ダニエル・グランヴィル	レヴィ家のもと下男兼庭師。浮浪者同然の生活を送っている男
ニコライ・イリイチ	謎のロシア人。矢吹駆の宿敵
ジャン＝ポール・バルベス	パリ警視庁警部
ルネ・モガール	パリ警視庁警視で〈アンドロギュヌス〉事件の捜査責任者
ナディア・モガール	ルネの一人娘でパリ大学学生
矢吹駆（かける）	謎の日本青年

——何だって、お前は神が両性を具している
と言うのかね、トリスメギストスよ。
——その通り。アスクレピウスよ、神のみな
らず、動物も植物もすべて……

ヘルメス文書「完全な話」より

序章　ルアーブルの女

寒々しい晩秋の夕刻だった。

日没が早まる季節のため、もう日は完全に暮れ終わっていた。空は、古い石の家々の頭上で、早くも黒々とした夜の色に沈んでいた。

陰気な軋み音をたてて、汚れた暗緑色の塗料もあちこち剝げかけている旧式の格子扉が、一方から他方の端へ、ゆっくりと折り畳まれていく。ホームが造られている地中の深みから小さな広場に面した地下鉄出口まで、満員の乗客を運んできた大型エレベーターの鉄扉が、ようやく片端に畳まれ終わった。そして、歳月に古びた五十人乗りの巨大な鉄箱から、闇が落ちて冷たい風の吹き抜ける晩秋の街路に、帰宅を急ぐ人々が肘と肘を擦り合わせ、肩と肩で押し合うようにしながら無秩序に溢れ出した。

そこは、見窄らしげでちっぽけな場末の広場だった。鉱物油の臭気が染みついた満員のエレベーターから押し出されたばかりのシルヴィーは、どこか侘しげな仄黄色い街灯の光で、腕時計の小さな文字盤をちらりと眺めた。

六時五十二分。急がなければ商店が閉まってしまう時刻だった。街路には、疲れ切ったように肩をまるめ、あるいは他人の視線を拒むように肩を竦めて、重たそうな買物袋を下げた主婦たちがそそく

さと行き交っていた。

急がなければ。

緩い下り坂になっている場末の通りを、そこだけとり残されたように暗がりから浮き上がって見える何軒かの商店の灯の方へ、娘は小走りに急ぎ始めた。晩秋の冷たい風が、娘の貧しげな外套の裾を翻した。

お祝いに、今夜の夕食は少し贅沢にしてもいいわ。あれほど待ち焦がれていた奇跡が、とうとう現実のものになろうとしているのだもの……。

続けて、それにしてもなんと素晴しい偶然だろうか、と娘は考えた。夜、テレヴィで、長いこと観たいと思っていながらどうしてもその機会のなかったドミニク・フランスの主演映画を放映するという日に、初めて映画会社の人間に話しかけられたのだ。……ドミニク・フランスと私が本当にそっくりかどうか、今夜こそ自分の眼で確かめられるんだわ。

シルヴィー・ラテーヌはようやく十九歳になったばかりの娘だった。シルヴィーはよく、戦前のことを知っている両親の世代の大人たちから、一九三〇年代の伝説的な美人女優ドミニク・フランスに顔がそっくりだといわれることがあった。何度か古いブロマイド写真を見る機会があったけれども、シルヴィー自身にもその女優の顔は自分によく似ているように思われた。そんなことで以前から、一度でもドミニク・フランスの主演映画を観てみたいものだと思っていたのだが、しかしそれは無理な相談というものだった。普通、街の映画館で戦前の映画は上映していないし、シルヴィーの調べた限りでは、ドミニク・フランスの映画がリバイバル上映されたという話も絶えてなかったのだ。

事情通のあいだでは、半年以上も前からこの企画が注目されていたらしいが、ドミニク・フランスの出世作『青い麦』が、今夜、つまり十一月二十四日午後八時からテレヴィで放映されるということを、一週間分まとめて載る〈フランス・ソワール〉紙のテレヴィ番組紹介欄で数日前に知った時、シ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ルヴィーはまるで有頂天になった。番組紹介欄の記事を読むうちに興奮はますます深まった。十一月二十四日の『青い麦』は、ドミニク・フランス主演映画の特集企画のうちその第一回目の番組に過ぎないらしい。つまり、今年いっぱいのあいだ火曜日には毎週必ず、ドミニク・フランスの主演映画がテレヴィで観られるということになるわけだ。

ドミニク・フランスは、一九三一年に『青い麦』のヒロイン、ヴァンカの役で映画に初出演した。以後十年間でドミニク・フランスの主演映画は全部で十六本を数えたが、今回はそのなかでも特に選んで、著名な文芸作品を映画化した五作品だけを連続放映するというのがこの番組の企画だった。新聞によれば、第一回のコレット原作『青い麦』に続いて、第二回はデュマ・フィス原作の『椿姫』、第三回はモーリアック原作の『愛の砂漠』、第四回はケッセル原作の『昼顔』、第五回はプルースト原作の『アルベルチーヌ』という順で放映されるらしい。最後の『アルベルチーヌ』は、第二次大戦が始まってから完成したため、戦中戦後の混乱に紛れて、とうとう一度も正式に公開されたことがないという不運な作品で、テレヴィ放映が同時に初公開になるということだった。

シルヴィーは去年、高等中学を卒業してじきに、両親の反対を押し切って故郷のルアーブルから首都パリに出てきた。控えめでおとなしく、少し内気なところのある性格だったから、親の強い反対意見を無視して単身上京し、パリで一人暮らしを始めるというのは、彼女自身にとってもかなりたいへんな決断だったといっていい。上京してまもなく、就職先はサン・ジェルマン・デ・プレのドラッグ・ストアに決まった。その店の煙草売り場で売り子を始めてから、早くも一年以上の歳月が経過しようとしている。

シルヴィーはその仕事を偶然に選んだのではなかった。薄汚れた灰色の石造建築のあいだで、そこだけ奇妙に華やかな雰囲気を湛えた全面硝子張りのその店には、有名な映画製作者や俳優、監督を始め多くの映画関係者たちが出入りしているという噂だった。そこで煙草を売っていれば、いつかは映

画会社の人間の眼にとまるかもしれないのだ。

シルヴィーは、少し風変わりなところのある性格の娘だった。映画女優に憧れ、本当に映画女優になりたいと思ったのは、元をただせば、顔が往年のスター女優ドミニク・フランスに酷似していると繰り返しいわれ続けてきたせいかもしれなかった。そのために上京し、そのために映画人が多いというサン・ジェルマン・デ・プレの店に就職したのではあったけれども、映画女優を目指す娘たちが普通選ぶような方法――演劇学校で堅実に演技を学ぶとか、まず名前を売るためにモデルなどの仕事を探すとか――に、シルヴィーはまるで関心を持たなかったのだ。

映画女優……。シルヴィーにとってそれは、看護婦、女秘書、美容師、等々のあいだに置かれた職業選択上のひとつの可能性ではなかった。話に聞くドミニク・フランスの存在と映画女優への希望は、シルヴィーの頭のなかで絡み合ってひとつのものになり、地方都市での死ぬほど退屈な学校生活の灰色が、一瞬、光眩い色彩鮮やかな異世界に反転するだろう奇跡への信仰の象徴となっていたのだった。

だからそれは、なによりも不意にシルヴィーに襲いかかる運命の一撃でなければならなかった。努力で、願望で、人為的にそれを求めようとすることは、逆にそこから、光の輝きを剝ぎ取ることにさえなってしまうだろう。あくまでもそれは、人智を超えた必然性として、いやむしろ恩寵めいたものとして、彼方から奇跡のように到来するべきものでなければならなかったのだ。パリに出て、映画人がよく利用するという店に勤めた。これだけで、為すべきことはすべてであるはずだった。それ以上のわざとらしい作為は、かえって、シルヴィー自身の特権的な奇跡への確信を、不純で瑣末な日常性の世界に頽落させるものとなってしまうだろう。後はただ、来たるべき運命の日を待つだけだった。

高卒の若い女店員がほとんどそうであるように、シルヴィーの給料も僅かなものだった。パリも場末になる二十区の、ポルト・デ・リラの近くに借りた一間きりの屋根裏部屋だったが、その部屋代を払い、どうしても必要な一か月分の生活費を引くと、もう手元には幾らも残らないというほどの暮ら

しだった。だから、高価な化粧品も香水も毛皮も、シルヴィーの生活には無縁だった。そして、ほとんどいつも質素な身なりをしていたけれども、若い弾むような肢体と、ドミニク・フランスに酷似しているという美貌は、当然のように多くの男たちの熱心なまなざしを惹きつけた。サン・ジェルマンの不良少年、ソルボンヌの貧乏学生、モンパルナスの青年プレイボーイ、オペラ通りに会社がある中年実業家……。無数の男たちが、あるいは秘密めかして、あるいは大胆に、あるいは素っ気なく、あるいは媚びるような表情でシルヴィーに近寄ってきた。夏のことだったが、自宅の近くで見知らぬ男に付きまとわれて怖い思いをしたこともあった。浮浪者めいた様子の薄気味悪い中年男で、最後には部屋にまで押し入ってきそうになったのだ。シルヴィーの悲鳴で同じ階に住む男たちが駆けつけ、侵入未遂者は取り押さえられて警官の手に引き渡されたのだったが。

十六歳の夏ルアーブルで、パリからヴァカンスに来たルノー・アルビーヌの青年にシルヴィーは処女を与えていた。いかにも都会人らしい物腰や魅力的な顔立ちに惹かれたせいもあったけれど、少女らしい性への好奇心が本当の理由だった。この一年のあいだも、誘われるままに軀を開いたことは数回あったが、どの相手とも一夜きりの関係だけで終わった。男たちは誰もが強くそれを求めたが、継続的に交際したいとシルヴィーが思うような相手は一人もいなかったのだ。

シルヴィーは一年のあいだ待ち続けたが、彼女に奇跡をもたらすべき運命の男はまだ現われようとはしなかった。煙草の箱を売りながら、娘はなおも、必ず現われるはずの男を飽きることなくひたすら待ち続けていた。

実存主義者たちが出没した第二次大戦直後の昔から、サン・ジェルマン・デ・プレは文学者、歌手、俳優など多くの芸術家たちが集まる街として知られていた。珈琲店〈フロール〉や〈オー・ドゥ・マーゴ〉がこうした連中の溜まり場だった。今では観光名所になってしまったこれら有名珈琲店と較べれば、シルヴィーの働くドラッグ・ストアがサン・ジェルマン・デ・プレに登場したのはごく最近の

ことだというべきだろう。

「ドラッグ・ストア」という言葉は、「ホット・ドッグ」や「ロックン・ロール」と同様に、戦後になってアメリカから入ってきたものに間違いはない。しかし、シャンゼリゼ・クレマンソーやエトワール広場、そしてオペラ広場、サン・ジェルマン・デ・プレといった具合に、パリでも最高級の中心街に続々と店を開いたフランス製のドラッグ・ストアは、同じ名前で呼ばれてはいても本場アメリカでよく見かける、いわばアメリカ的野暮ったさの典型のような簡易コーヒー・スタンド付きの薬局兼雑貨店とは、与える印象がまるで違っている。

それは、戦後アメリカの繁栄と大量消費文化に対する、フランス人の憧憬と欲望とを純粋に結晶化することで出来上がった華麗で幻惑的な異空間だった。パリの街には珍しい終夜営業ということもあるが、深夜サン・ジェルマン・デ・プレの四つ角に立つと、闇のなかで黒々と蹲(うずくま)っている、古色蒼然としたいかにも陰気臭い石造建築のあいだに、ぽっかりと浮かんだ眩い光の泡が人目を惹く。それが、シルヴィーの勤めるドラッグ・ストアだった。

店内に入ると、硝子と軽金属を多用した内装が現代的な機能美を見せている。そして、この国ではたとえ百貨店であってさえ、電気の節約のためかどことなく薄暗い印象を与える室内照明が普通なのに、ここでは惜しみない多量の蛍光照明により、眼底を灼くほどの白色光の洪水が溢れ返っている。広い店内には、薬局だけでなく、喫煙用品、スポーツ用品、レコード、ポケット・ブック、文具、趣味(ガジェット)の品、様々の小物など目も綾(あや)なものたちが、売り場ごとに、溢れる光のなかであまりにもくっきりと、物神ほどにも見る者を恍惚とさせる、華麗な、そして魅惑的な表情でぎっしりと詰め込まれている。ピザなどを出す軽食用のコーナーも、それとは別にある喫茶コーナーも、普通の街角の珈琲(カフェ)店がいかにも見窄らしく貧しげに見えてしまうほどにも、現代的に洗練された室内装飾で隈なく飾りつけられ輝き渡っている。

朝から夕方の交替時刻まで、シルヴィーは毎日売り場に立ち続ける。少し客足の途絶えた時には、疲れたまま陶然とした気分になっていることがよくあった。あたりに濃密に立ち込めている、洗練された、ほとんど繊細なほどの欲望と消費の雰囲気が、売り子のシルヴィーの魂にまで浸透してうっとりとした気分にさせてしまうのかもしれなかった。光ともいたちが混ざり合い、溶け合い、果てしなくゆっくりと渦巻いている。そんな時シルヴィーは、まるで巨大な万華鏡の世界に巻き込まれた気分になってしまう。

今日の午後、そんなうつらうつらした気分でいる時だった。シルヴィーはふと我に返って顔を上げ、そしていった。夢見心地がまだ声に残っていたかもしれない。

「……何にいたしましょうか」

様々の色をした紙箱や紙袋が綺麗な各国の煙草が、隙間なくきちんと並べられている売り場の硝子箱の前で、ひとりの男が熱心にシルヴィーの横顔を眺めていたのだ。その、凝視といっていい執拗な視線が、シルヴィーの注意を売り場に引き戻したのだった。男は、いかにもこの店の雰囲気にふさわしげに見えた。わざと少しばかり崩した感じの、趣味のいい派手派手しさの雰囲気。

「フィリップ・モリスをひとつ」

注文された煙草の紙袋を硝子板の台の上に置く。同時に男は、茶色の小額紙幣と一緒に、小さな長方形の厚紙をシルヴィーの方に差し出した。シルヴィーは受け取ったばかりの名刺を不審げにちらりと眺めた。そして驚きのため思わず息を呑み、一、二回瞬きしてからもう一度改めて、厚紙に刷り込まれた黒い活字をじっと見詰めた。

間違いはなかった。そこに刷り込まれた肩書きは、シルヴィーも知っている有名な映画会社のものだった。

「少し時間をいただけますか」

丁寧な口調で男がいった。緊張のため胸苦しいほどの気持で、口籠るようにシルヴィーはいった。

「はい、いいえ」

自分の言葉の矛盾に気付いて、シルヴィーは顔を赤らめ、それから早口でいい直した。無意識のうちに声を潜めていた。

「今は駄目なんです。でも、あとで仕事が終わってからならば……」

「何時ですか、終わるのは」

「四時に交替なんです」

「では、四時十分にサン・ジェルマン・デ・プレ教会の正門の前で待っています。悪い話ではないと思いますよ、あなたにとってはね」

「ええ。行きますわ、かならず」

男が立ち去ると、シルヴィーはさりげない態度で周囲の様子を窺った。勤務中に客と個人的な会話をしていたということもあったが、それよりも、まだどうなるか判らない曖昧な話を他人に知られるのが嫌だったからだ。運よく誰にも気付かれなかったらしい。隣でライターやパイプなどの喫煙用品を売っているセシールも、幾人かの客の応対に忙しく、シルヴィーの方に注意を向けていた様子はなかった。ほっとしたシルヴィーは、掌のなかに隠すようにして、映画会社の男の名刺をもう一度ゆっくりと眺めた。すると、改めてまた、新鮮な期待と興奮が軀の中心に満ちてくる。待ち切れない気持でケルトンの玩具みたいな腕時計を眺めると、ようやく三時半になろうとしているところだった。

……あと四十分だわ、四十分で私の運命が開けるかもしれないんだわ。これまで一年以上待っても飽きなかったのに、その僅か四十分間が、シルヴィーにはほとんど耐え難いほどの長さに感じられるのだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com